

## 論 文

### アトキンソンの「自殺の社会プロセスモデル」再考 ——デュルケムの「逆倒的な方法」の観点から——

杉尾 浩規

#### 要 旨

本稿の目的は、アトキンソンが提案しその後に撤回した自殺の社会プロセスモデルを、異なる視点から人類学を含む自殺研究の一般的枠組みとして再考することである。自殺の社会プロセスモデルは、当初、公式統計に依拠する自殺研究に対する批判として提案された。このモデルでは、自殺は三つのステージから成る社会プロセスとして捉えられ、各ステージに固有の社会的要因が自殺行為で重要な働きをする。第一ステージは自殺行為の前段階に、第二ステージは自殺行為とその結果の間の段階に、第三ステージは自殺行為の結果とその記録の間の段階に対応し、「応答」、「介入」、「隠蔽」がそれぞれのステージで関連する社会的要因である。

自殺の社会プロセスモデルは、多様な自殺研究の成果を社会プロセスという観点から検討し、人類学における自殺の民族誌的資料や概念を他の分野の自殺研究と比較することを可能とする。しかし、アトキンソンは、公式統計作成プロセスに関する経験的調査の後、デュルケムの社会決定論であることを理由にこのモデルを撤回した。本稿は、自殺の社会プロセスモデルを自殺研究の一般的枠組みとして示すために、デュルケム『自殺論』における「逆倒的な方法」を検討し、このモデルを自殺の社会的原因についての実在性という観点から再考する。

結論として、アトキンソンが採用した社会決定論とは異なる自殺の社会的原因の実在性という観点から、自殺の社会プロセスモデルを自殺研究の一般的枠組みとして位置付け、このモデルと共に人類学における自殺研究を考察する展望が開かれることが示される。

#### キーワード

自殺の社会プロセスモデル、社会決定論、逆倒的な方法、アトキンソン、デュルケム

#### 1. はじめに

本稿では、アトキンソンが1968年の論文で提案し1978年の著作で撤回した自殺の社会プロセスモデルに注目し(Atkinson 1968, 1978)<sup>1</sup>、このモデルを、アトキンソンとは異なる

---

<sup>1</sup> 本稿では、アトキンソンが「自殺プロセスモデル」(Atkinson 1968: 90, 1978: 69)や「自

る視点から、人類学を含む多様な自殺研究の一般的枠組みとして位置付ける。自殺の社会プロセスモデルは、公式統計の学術的資料価値に関する議論を背景としながら、公式統計に依拠する自殺の社会学研究に対する批判として、文献調査に基づき提案された。その特徴は、社会プロセスという視点から包括的に自殺を捉えることにある。しかし、アトキンソンは、公式統計作成プロセスに関する経験的調査の後、その調査結果を考察する中でこのモデルを撤回した。その理由は、自殺の社会プロセスモデルが、公式統計に依拠する研究の代表であるデュルケム『自殺論』(デュルケム 1985)と同様、社会統合によって自殺を説明する自殺の社会決定論であることに求められた。本稿では、デュルケム『自殺論』を自殺の社会決定論ではなく自殺の社会的原因の実在性に関する研究と捉えることによって、自殺の社会プロセスモデルを自殺研究の一般的枠組みとして再考したい。

自殺の社会プロセスモデルに注目する理由をはじめに述べておきたい。筆者は、予備調査を含めて約五年間(2004年～2009年)、太平洋の島嶼国フィジー(フィジー共和国)にて自殺に関する現地学術調査を実施した。この調査からフィジーの自殺に関する事例や数値に関する情報が得られたことは事実である(e.g., Sugio 2011, 2012a, 2013b)。しかし、これらの調査成果を人類学的に考察するにはどうすればいいのか。このような観点から実施した自殺の人類学研究に関する文献調査は、満足できる先行研究の蓄積が不在であるという結果を示した。民族誌的情報として記述されている自殺は、個人が社会関係へ積極的に働きかける戦略的行為として捉えられる傾向にあり、復讐自殺やギャンブル的あるいは自殺的冒険のような一般化が試みられている。しかし、これらの記述や概念の検討、あるいは西欧諸社会の自殺との類似性や文化的差異に注目する比較文化論的作業などは、進展していないのが現状であると思われる(杉尾 2012b)<sup>2</sup>。このような状況で必要なのは、人類学における研究成果を組み込むことが可能な自殺研究の一般的枠組みの確保であると筆者は考える。

このような問題意識に基づき、本稿ではアトキンソンによる自殺の社会プロセスモデルに注目する。しかし、自殺の社会プロセスモデルを自殺研究の一般的枠組みとして位置付けようとする際に問題となるのは、このモデルを提案したアトキンソンが後にこのモデルを撤回したことである。そのため、本稿では、自殺の社会プロセスモデルをアトキンソンの自殺研究全体の中に位置付け、このモデルが撤回された背景となる議論も考察の対象とする。そして、それに続いて、デュルケム『自殺論』の「逆倒的な方法」に注目しながら、自殺の社会プロセスモデルをアトキンソンとは逆に肯定的に評価したい。しかし、これは、アトキンソンによる社会プロセスモデルの評価を否定することを意味しない。むしろ、デ

---

自殺プロセスの連続モデル」(Atkinson 1978: 68)と呼ぶ自殺モデルを、「自殺の社会プロセスモデル」と統一して使用する。

<sup>2</sup> このような先行研究の状況を踏まえ、筆者は、デュルケム『自殺論』を「固有の実在性をもった集合精神の一種独特の状態」(デュルケム 1985: 32)という社会性を備えた自殺傾向の実在論的研究と位置付けながら、デュルケム『自殺論』における集団本位的自殺と自殺定義の考察を通して、実在する自殺の社会的原因というデュルケムの考えを視野に入れた研究を人類学的自殺理解の方向性として提案した(杉尾 2013a, 2014)。その際特に注目したのはデュルケムの「個人」という論点である。これは人類学における人格研究という文脈に位置付けられると思われる。

デュルケムによる逆倒的な方法に注目することで、アトキンソンとは異なる視点から、アトキンソンとは異なる評価を自殺の社会プロセスモデルに与える、というのが本稿の意図である。

本稿の構成は以下の通りである。2章では、自殺の社会学研究における公式統計の学術的資料価値を巡る問題を図式的に整理する。3章では、アトキンソンによる自殺の社会プロセスモデルを整理する。4章では、アトキンソンによる公式統計作成プロセスに関する経験的調査を整理し、その調査結果に関する議論の中で自殺の社会プロセスモデルがデュルケムの社会決定論として撤回された点を確認する。5章では、デュルケム『自殺論』を社会決定論とするアトキンソンの想定に注目し、デュルケム『自殺論』第二編第一章における逆倒的な方法に関する議論を通して、自殺の社会プロセスモデルを、アトキンソンが採用した社会決定論とは異なる自殺の社会的原因の実在性という観点から捉える。

このような議論を通して、本稿では、自殺の社会プロセスモデルを、人類学を含む自殺研究の一般的枠組みとして位置付けたい。なお、本稿は2章でテイラーに依拠しながら自殺の社会学研究を整理するが、これは自殺の社会プロセスモデルをアトキンソンの自殺研究の中で理解するための背景として必要だからである。本稿の関心は、自殺の社会学研究それ自体ではなく、人類学を含む自殺研究の一般的枠組みであり、そのために自殺の社会プロセスモデルに注目することを、予めお断りしておきたい。

## 2. 自殺の社会学研究

### 2-1. 自殺に対する二つのアプローチと自殺の公式統計批判

本章では、自殺の社会学研究を整理し、その中でアトキンソンの自殺研究の特徴を確認する。本節では、テイラーに依拠しながら (Taylor 1988)、自殺の社会学研究の始まりにデュルケム『自殺論』を位置付け、それ以降の自殺の社会学研究を、自殺に対する二つのアプローチの対立として整理する<sup>3</sup>。そして、次節では、このように整理された自殺の社会学研究の枠組みの中にアトキンソンの自殺研究を位置付け、その特徴を確認する。

テイラーによれば、デュルケム以降の自殺の社会学研究は、公式統計に依拠する伝統的な実証主義的アプローチと、それに対する批判的アプローチとして現れた自己破壊現象における主観的意味付けに注目する解釈的アプローチの対立として図式化される (Taylor 1988: 3-46)。これら二つのアプローチは、自殺の公式統計の学術的資料価値に対する評価の違いによって区別される。その評価は、公式統計に含まれるエラー (数え間違い) をランダムな発生とするか系統的バイアスの現われとするかによって分かれる。実証主義的アプローチは、エラーをランダムと見なし、自殺研究における公式統計の使用を認める「容認」派となる。対して、解釈的アプローチは、エラーを系統的バイアスの現われと見なし、その使用を疑う「懐疑」派となる<sup>4</sup>。

<sup>3</sup> デュルケム『自殺論』以前の自殺研究については、例えばダグラス (Douglas 1967: 3-12) を参照されたい。

<sup>4</sup> テイラーは、別の著作で、これら二つのアプローチそれぞれに下位区分を設定し、自殺の公式統計を巡る立場を計四つに分類している (Taylor 1982: 43-64)。容認派は、その容認

公式統計に依拠する伝統的な実証主義的アプローチが問題視され、解釈的アプローチ出現の契機となった研究者はダグラスである (e.g., Douglas 1967)。ダグラスは、議論という方法で、自殺の公式統計の学術的資料価値に対して深刻な問題提起を行った。ただし、ダグラス以前から、公式統計に依拠する自殺研究では、公式統計の「妥当性 (validity)」と「信頼性 (reliability)」が想定されると同時に問題視されていた。妥当性の想定とは、「研究者による自殺の理論的定義は、公式統計作成者 (公式統計作成に関与する人々、データを収集する役人) が採用する公的定義に一致する (ことが可能)」という想定である。また、信頼性の想定とは、「公式統計作成者は、公的定義に基づき、効率的かつ一貫して自殺を分類する (ことが可能)」という想定である。同時に、これら二つの想定は問題視もされてきた。妥当性は、自殺の理論的定義を公的定義に関連付けるための「操作化」として問題とされ、信頼性は、自殺の公式統計における過少記録による「暗数」として問題とされる。

自殺の公式統計の信頼性に対する懐疑は古くから存在し、十九世紀ヨーロッパの自殺研究者にまで遡る (Douglas 1967: 171-178)。また、1960年代からはこの問題を対象とした調査も実施され始めた (e.g., Hendin 1960, 1962; McCarthy & Walsh 1966, 1975; Walsh et al 1975; Weiss 1964)。全体として見れば、公式統計の信頼性は社会学に限定されず広く自殺研究全般で問題とされてきたが、それによって公式統計の学術的資料価値が否定されることはなかった。これは、統計の信頼性が主要議題とされた第四回自殺予防国際会議 (1967年) の公式的見解に示されている。そこでは、公式統計の信頼性が問題視されると同時に、自殺の公式統計研究の継続が認められた (Stengle & Farberow 1968)。この立場は現在まで続いていると言える (e.g., Lester 2008) <sup>5</sup>。

ダグラスによる自殺の公式統計に対する批判は、その妥当性に向けられる。ダグラスに従えば、自殺の公式統計研究では、理論 (的定義) の検証に実証的データを使用する場合に要請される「理論」と「データの対象 (測定対象)」の関連付け、つまり、自殺の理論的定義と公的定義の関連性は、操作化 (操作的定義の導入) として既に問題とされると同時に処理されてきた。それゆえ、改めて自殺の公式統計の妥当性それ自体を問題としても、それは操作化問題とされうる (Douglas 1967: 190) <sup>6</sup>。それに対して、ダグラスによる妥当

---

度の強弱に応じて、「一般的容認」と「限定的容認」に下位区分される。懐疑派も、その懐疑度の強弱に応じて、「否定」と「懐疑」に下位区分される。容認派の代表はデュルケムとされ、一般的容認に含まれる。他方、懐疑派の代表はアトキンソンとされ、その立場は懐疑から否定へ変化したとされる。なお、アトキンソンの立場を懐疑から否定への移行とするテイラーの位置付けを本稿の議論の中で捉えれば、自殺の社会プロセスモデルの提案と撤回に、それぞれ対応すると言えるだろう。ただし、後に触れるように (本稿 4-2 を参照)、もしもテイラーの分類法による解釈的アプローチを、自殺現象に関係する個人の主観的意味の解釈として限定するなら、アトキンソンの自殺研究をそこに含めることには問題があると思われる。しかし、本節では、自殺の社会学研究の一般的理解として、テイラーによる整理に従いたい。

<sup>5</sup> 社会学における自殺の公式統計の信頼性を巡る研究及びその評価については、例えばアトキンソン (Atkinson 1978: 50-61) やテイラー (Taylor 1982: 45-46) を参照されたい。

<sup>6</sup> その典型は、ギブスとマーティンによるステータス統合理論である (e.g., Gibbs & Martin 1964)。彼らは、デュルケムの社会統合概念を社会的ステータスとして操作化し (Gibbs & Martin 1964: 14-33)、自殺の公式統計研究を継続した。

性批判は、公式統計に含まれるエラーが系統的である可能性を示すという、信頼性を問題とすることによる妥当性批判である<sup>7</sup>。ダグラスは、社会学者の理論的定義と公式統計作成者の公的定義の一致（の可能性）それ自体を問題とするのではなく、そもそも公式統計作成者が統計作成プロセスにおいて一致して公的定義に従っているのかという問題を、自殺の公式統計に対して提起した。

ただし、ダグラスの批判の論点は、公式統計作成者は公的定義に「従っていない」という結論に向かうものではない。逆に、彼らが公的定義以外の枠組みに「従っている」可能性を主張することにある。もしもそうであるならば、エラーはランダムとは言えなくなる。なぜなら、公式統計作成者は、数え間違いをしているのではなく、公的定義以外の枠組みに従って自殺を記録している可能性があるからである。そして、その場合、公式統計に含まれるエラーは系統的バイアスの現われとなる。ダグラスは、公式統計作成者に共有されている自殺についての常識的知識がバイアスの系統性の源泉である可能性を指摘し、この主張の経験的調査による検証作業の必要性を強調した（Douglas 1967: 229）。ダグラスに従うなら、自殺の公式統計作成プロセスは、客観的基準に従った自殺認定プロセスではなく、そのプロセスに関与する人々が共有する自殺についての常識的知識に大きく影響され方向付けられた（つまり系統的に偏った）人為的基準に支配されている記録化のプロセスの可能性があることになる<sup>8</sup>。

## 2-2. アトキンソンの自殺研究

ダグラスが議論によって展開した自殺の公式統計批判は、アトキンソンによって引き継がれた。アトキンソンは、ダグラスの問題提起に従い、自殺の公式統計の人為性を視野に入れた包括的自殺研究という方向に進んだ。このような関心から文献調査に基づき提案されたのが、次章で整理する自殺の社会プロセスモデルである。しかし、4章で示すように、自殺の公式統計作成プロセスに関する経験的調査の後、アトキンソンは、その調査結果を考察する中でこのモデルを撤回した。本節では、アトキンソンが自殺の公式統計研究を問題化する際の論点を整理し、アトキンソンの自殺研究の特徴を確認する。

<sup>7</sup> ダグラスは、自殺の公式統計についての問題意識を次のように述べる。「しかしながら、もしも自殺統計に系統的バイアスが存在し、それによって統計がそのような[自殺の社会学理論の]検証にとって信頼に値しないことが示されるならば、…これらの公式統計は自殺の社会学理論の構築や検証の際に重要な価値を持ち得ないという結論へと、我々を導くに違いない。…私の目的は、自殺の公式統計はたぶん多くの仕方で偏り、それは時々同じ方向への偏りであり、その結果、これらの公式統計に支えられている様々な自殺の社会学理論は信頼できない点を示すことである（[]内引用者）」（Douglas 1967: 191）。

<sup>8</sup> 公式統計作成プロセスは、個々の担当者が自殺の公的定義を個別的事例に当てはめる際に生じる恣意性（定義と現実のギャップ）に由来するエラーの集積である、というのがダグラスの主張なのではない。ダグラスの論点は、このように考えればランダムなエラーを含む個々の事例の集まりに過ぎない統計がなぜ安定しているのか、ということである。つまり、ダグラスの批判は、公式統計の安定性を虚構であると暴くことではなく、その安定性が現実に発生する自殺数の安定性の現れとは言えない可能性があるという点に向けられる（Taylor 1982: 62）。その原因の一つとして、公式統計作成者が個別の自殺認定の際に自殺についての常識的知識を参照している可能性が示唆される。

アトキンソンは、公式統計に依拠する自殺の社会学研究を、自然科学をモデルとして採用するという意味で、実証主義的と位置付ける。それは、二つの特徴に反映される。一つ目は、客観的事実としての自殺とその客観的測定結果としての公式統計、という特徴である。二つ目は、普遍的因果法則としての自殺の社会的要因、という特徴である。

一つ目の特徴に関して、アトキンソンは、公式統計に依拠する自殺の社会学研究が、「対象」、「方法」、「理論」という点で、自然科学的客観性を備えた実証主義的想定に基づく研究であるとする。これらの想定によれば、自殺という社会現象は、自然的事実と同様に客観的事実であり（実証主義的研究「対象」）、自然科学と同様の客観性を備えた方法によって測定可能である（実証主義的研究「方法」）。それゆえ、自殺の社会学研究は、自殺と他の客観的測定結果に基づく一般的経験則を、同じく客観的測定結果によって検証可能である。あるいは、抽象的社会理論から演繹的に導出された仮説を客観的測定結果によって検証することで、その理論を一般的経験則とすることが可能である（実証主義的研究「理論」）。つまり、自殺の社会学研究は、客観的事実である自殺の測定結果である公式統計に基づき自殺を説明する、という意味で実証主義的とされる（Atkinson 1978: 17-18）。

二つ目の特徴に関して、アトキンソンは、公式統計に依拠する自殺の社会学研究では、自殺の原因を説明するための社会理論が、自然科学における自然法則をモデルとした普遍的因果法則として想定されているとする。通常、この特徴は、自然科学と同様、普遍的因果法則は統計的事実に基づく一般的経験則でなければならないという原則に従う。しかし、アトキンソンは、デュルケム『自殺論』では自殺の原因を説明する社会理論がそれ自体で先取りの普遍的因果法則として想定されている点を問題とする。この意味において、デュルケム『自殺論』は自殺の社会決定論とされる。

「デュルケムは、統計技術が社会学的仮説の検証に使用されうる方法をただ論証することだけで、厳密に客観的な社会学という考えを普及させることに成功した、このように結論することは常に心をそそる。しかし、…幾つかの自殺統計の網羅的分析がデュルケム以前に既に幾つか存在していたし、これは、そのような結論が話の一面に過ぎないことを示唆している。多分、より重要なのは、彼が、発見された統計的差異の理由を説明するために一連の法則的命題を構築することに成功したことであろう。というのも、自然科学の方法が社会的事実の研究に使用されうるという考えに加えて、実証主義のもう一つ別の鍵となる特徴はその決定論だからである。そこには、自然科学者が自然法則を発見してきたのと同じように社会学者によって発見されうる社会法則が存在する、という信念が伴われている（斜体強調は原著）」（Atkinson 1978: 18）。

以上のように、アトキンソンは、自殺の公式統計研究における二つの特徴（自殺及びその公式統計の客観的事実性と、普遍的に妥当する因果法則としての自殺の社会理論）を問題視する。そして、公式統計に依拠する自殺の社会学研究を「穴掘り研究」に例えながら批判し（Atkinson 1978: 20-21）、検死官ら生者による死の意味付けや定義をめぐる実践という問題に取り組む必要性を強調する。

「バラの茂みを植えるために穴を掘ることと殺人の被害者を埋めるために穴を掘ることを、同じ穴掘り理論を参照することによって説明しようとするのは、明らかに滑稽であろう。というのも、「穴掘り」は同一の形態の行為に言及しているように外面的には思われるが、その言語的カテゴリーに分けられる様々な活動と関係しうる象徴的意味は非常に多いので、その意味について更に明確にすることなく「穴掘り」について話すことはほとんど意味が無いからである。しかしながら、自殺について話すということになると、社会学者や他の分野の専門家は、このことに含まれると思われる種類の抑制から著しく解放され、「自殺」と呼ばれる行為についてすぐに一般的な話をしてきた」(Atkinson 1978: 24)。

本章を要約する。デュルケム以降の自殺の社会学研究は、公式統計に含まれるエラーの評価方法の違いに応じて、公式統計に依拠する実証主義的アプローチと、その批判として現れた解釈的アプローチの対立として位置付けられる。公式統計に依拠する自殺研究への批判は、ダグラスによる公式統計の学術的資料価値への問題提起を端緒とし、アトキンソンに引き継がれた。アトキンソンの批判は、実証主義が想定する自殺及びその公式統計の客観的事実性と普遍的因果法則としての社会理論に向けられた。その批判は、公式統計に依拠する自殺研究全般を対象とするが、特にデュルケム『自殺論』における自殺の社会決定論に向けられている(表1参照)。

表1 自殺の公式統計(自殺率)に対する二つの立場

	立場	基本的想定	公式自殺統計の解釈	研究の焦点
実証主義的アプローチ (デュルケム)	容認	自殺は定義可能であり、それは操作化できる。それゆえ、自殺の公式統計は、学術研究資料の有用な源泉である。	自殺の公式統計に含まれるエラーは互いに相殺する傾向にある。それゆえ、自殺率は「現実の」自殺の率の代表標本である。	社会学研究は、公式統計に基づき、自殺率を社会要因や他の社会的影響という観点から説明する。
解釈的アプローチ (ダグラス→アトキンソン)	懐疑	公式統計は社会的構築物であり、統計作成者による自殺定義と収集手順は様々である。それゆえ、自殺率は系統的に偏る傾向にある。	自殺率が表しているのは、「現実」の自殺行為の代表標本ではなく、統計作成過程で影響を及ぼす系統的バイアスである。	社会学研究は、死が自殺として分類される仕方を調べる。そして/あるいは、代替的データの源泉を利用し自殺を説明する。

(Taylor 1988: 26) 掲載の表を修正し作成

### 3. アトキンソンによる自殺の社会プロセスモデル

#### 3-1. 自殺の社会プロセスモデル

アトキンソンは、1968年の論文(Atkinson 1968)において、自殺を社会プロセスとして捉えるモデルを提案した。本節では、アトキンソンによって提案された自殺の社会プロセスモデルを整理する。そして、次節では、このモデルに対するアトキンソン自身の評価を確認し、それとは別の観点からこのモデルについての考察を加える。

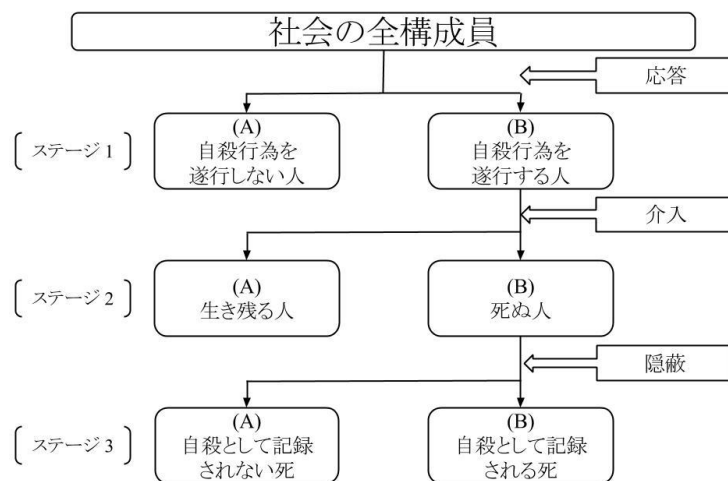
アトキンソンは、初めに、デュルケム『自殺論』以降の自殺の社会学研究における主要な目的は公的自殺率を説明することであり、自殺の公式統計は、説明されるべき事実であ

ると同時に自殺の社会学理論を検証するための証拠として使用されてきた点を確認する (Atkinson 1968: 83)。そして、公式統計は自殺の社会学研究で広く利用されているが、その学術的資料価値は不明瞭である状況に注意を促す (Atkinson 1968: 83-84)。公式統計の学術的資料価値は「妥当性」と「信頼性」として評価されるが (本稿 2-1 を参照)、公式統計が広く利用されているという事実は、これら二つが受け入れられていることを意味する。つまり、社会学者の自殺理論と公式統計作成者の自殺定義の一致 (の可能性) と、統計作成プロセスにおける系統的バイアスの不在が、公式統計に依拠する研究では共に受け入れられている。しかし、これは経験的調査によって裏づけられているのではない点を、アトキンソンは強調する。

「社会学者の大部分が、ほとんど何も知られていないデータ [公式統計] に基づき自殺の仮説をいつでも検証してきたという事実が示唆しているのは、公式統計を参照しながらデュルケムその他の自殺理論を更に検証化する以前に、情報収集者 [公式統計作成者] の自殺定義と彼らが死を自殺として分類するやり方に対する綿密な調査が必要である、ということである。目下のところ、公的源泉に由来するデータの使用に伴う諸問題がごく僅かであると想定することにも、それらが過去において適切に解決済みであると想定することにも、正当な理由は何もない ([ ] 内引用者)」 (Atkinson 1968: 84)。

このような状況を踏まえ、アトキンソンは、公式統計の学術的資料価値を判断するために経験的調査の必要性を強調する一方で、その価値の不明瞭さに伴う問題を視野に入れた包括的枠組みとして、自殺の社会プロセスモデルを提案した。このモデルでは、自殺は、「自殺行為の前段階」、「自殺行為とその結果 (非致命的か、致命的か) の間の段階」、「自殺行為の結果とその記録の間の段階」、という三つの段階からなる社会プロセスとして捉えられる。以下では、このモデルを構成する三つの段階 (「ステージ 1」、「ステージ 2」、「ステージ 3」) を整理する (図 1 参照)。

図 1 自殺の社会プロセスモデル



(Atkinson 1968: 89, 1978: 69) 掲載の図を修正し作成

自殺の社会プロセスモデルでは、任意の個人が各ステージの A と B のどちらに進むかは、問題となるステージに特有の社会的要因に依存する。このプロセスの始まりにあるのは特定の社会集団の全成員であり、その終わりには記録としての自殺、つまり学術的資料価値が不明瞭な自殺の公式統計がある (3(B))。プロセスの第一段階であるステージ 1 は、自殺



行為までの段階に対応する。ここでは、ある特定の個人による自殺のサイン、警告、メッセージなどに対する社会の側からの「応答」が、その後彼／彼女が自殺行為をしない(1(A))／する(1(B))を左右する社会的要因のタイプとなる。あるいは、そのような社会応答が、自殺未遂(非致命的自己破壊行動)に続いて自己破壊行動が繰り返されない(1(A))／繰り返される(1(B))を分けるのに関与する。

このステージに関連する古典的研究としては、コブラーとストットランドによる『希望の終わり』が挙げられる(Kobler & Stotland 1964)。彼らは、自殺の意図の伝達や自殺企図などを、助けと希望を求める他者への訴えと見なす。そして、その後その個人が自殺を実行化するかどうかは、この訴えに対する他者の応答、つまり社会応答の性質に大きく依存することを明らかにした。そこでは、社会からの肯定的応答は個人の「希望」となり、否定的応答は「希望の終わり」とされる(Kobler & Stotland 1964: 1-18)。

次に、プロセスの第二段階であるステージ2を見てみたい。自殺行為の実行化は、その個人の死を意味するのではない。言い換えれば、自殺行為の実行化にはその行為の結果は含まれない。このような自殺行為とその結果の間の段階がステージ2である。ここでは、ある個人によって実行化された自殺行為に対する社会の側からの「介入」が、その後彼／彼女が生き残る(2(A))／死ぬ(2(B))を左右する社会的要因のタイプとなる。つまり、ステージ2は、自殺行為者の生と死を分けるステージであり、自殺行為の結果が未遂(非致命的)となるか(2(A))／既遂(致命的)となるか(2(B))に関わる段階である。

このステージに関連する古典的研究は二つに区分できる。一つ目は、自殺行為の結果に影響を及ぼす介入を行為者の視点から捉える研究であり、「介入されたい」という当人の希望を自殺行為の中に位置付ける試みである。二つ目は、介入を社会の側から捉える研究であり、自殺行為の結果の偶然性に注目する試みである。ステージ2の意味が、自殺行為の結果は自殺行為から必然的に導かれるのではなく社会の側からの介入に左右されることにある点を踏まえれば、二つ目の研究がより重要であることは明らかである。しかし、同時に、介入されることへの当人の希望が自殺行為の中に含まれるなら、それは、社会による介入の成否に影響を及ぼすことも事実であろう<sup>9</sup>。

一つ目の研究は、ステンゲルが「アピール (Appeal)」と名付けた自殺行為の対他的性質に関係する。ステンゲルは、結果に関わらず自殺行為(自己破壊行動)全般の特徴の一つとしてアピールという対他的性質に注目した(e.g., Stengel 1970)。この特徴は、例えば自殺が他者の近くで実行化されることに典型的に現われる。「自殺意図についての何らかの警告がほとんど常に与えられている。自殺企図者は自殺行為の際、他の人びとの近くにとどまるか近づいていく傾向にある。自殺企図は警報としての機能を果たし、助けを求める

<sup>9</sup> アトキンソンがステージ2に対応させているのは二つ目の研究だと思われる。実際、一つ目の研究は、ステージ1に含める方が適切なのかもしれない(「介入されたい」という当人の希望は、否定的社会応答の後にも残り続ける「助けと希望を求める他者への訴え」の痕跡、と見なすことも可能である)。しかし、ここでは一つ目の研究をステージ2に含める。その理由は、次節で考察するように、アトキンソンがステージ1とステージ2に区別を導入している点を肯定的に評価するためである。ここでこれら二つのステージの類似点を指摘することで、両者に区別を設定することの重要性を次節で際立たせたいと考える。

アピールの効果をもつ。たとえそのようなアピールが意識的に意図されない場合でさえそうである」(Stengel 1970: 113)。ステンゲルが提案したアピールという性質は、後に、ファーブロウとシュナイドマンによって「助けを求める叫び (Cry for help)」と呼称され、現在の自殺研究の中心的概念となる (e.g., ファーブロウ&シュナイドマン 1969; シュナイドマン 2001)。

しかし、自殺行為者の生と死はアピールや助けを求める叫びとしてのみ理解可能だろうか。二つ目の研究はこの問題に関係する。そして、以下のファースの研究に示されるように、そのような理解は疑わしいと思われる。ファースは、太平洋のティコピア (Tikopia) 社会の自殺資料に依拠しながら、デュルケムが非西欧 (未開) 社会の主要な自殺類型として設定した集団本位的自殺に反論した (Firth 1961)<sup>10</sup>。ファースによれば、デュルケムの集団本位的自殺は、社会の個人に対する過度の影響力や厳格さ、つまり社会統合の過度の強さに関連する。それに対して、ファースは、社会が厳格か逆に寛容かという観点から単純に自殺を論じることはできないと主張する。なぜなら、そのような想定には、自殺を死の意図の当人による実現化とする別の想定があるからである。つまり、社会の厳格さから逃れるための唯一可能な選択肢として死が想定され、その選択肢を意図しそれを自ら実現化することが自殺とされている。ファースによれば、死の意図の当人による実現化という通常の自殺定義は、ティコピアでは通用しない。その理由は、ティコピアの若い男性による自殺方法とされる「カヌー航海 (Canoe-voyaging)」が同時に冒険的行為でもあり、そのため、カヌー航海を死の意図の実現化として、つまりその行為を自殺行為として、断定することはできないからである。ファースは、このようなカヌー航海を「自殺的冒険 (Suicidal adventures)」と名付ける (Firth 1961: 5)。

加えて、ファースは、たとえ社会の厳格さという観点を受け入れるにしても、それは自殺を引き起こすのではなく、逆に自殺行為の結果を非致命的にする役割を果たす、と主張する。ファースによれば、ティコピアにおけるカヌー航海者の生死は、救助作業に大きく依存している。ティコピアでは、カヌー航海のニュースが広まると救助隊が迅速に組織され、救助作業が実施されるからである (Firth 1961: 12)。カヌー航海者は救助作業を計算済みかもしれないし、そうではないかもしれない。そのため、救助作業は、先に指摘したカヌー航海者の死の意図の不明瞭さという問題を、より一層複雑にする。しかし、同時に、救助作業は、カヌー航海者の意図とは独立して、その結果を非致命的な方向へと傾向付ける要因でもある。

「救出手順の能率を考慮しなければ、社会の厳格さと自殺率を相互に関係付けることが不可能であることは全く明白である。社会の厳格性が何であろうと、救出手順が優れているなら、自殺の発生率は、自殺未遂は多いかもしれないが、比較的低いだろう。更に、救出手順が優れていて、自殺の発生率が低いという事実は、その社会がしっかりと構造化された社会であることを意味するだろう。もしも救出手順の組織化が不十分であり役に立たないならば、これは、その社会がより寛容に構造化されている、つまりそれほど厳格には

---

<sup>10</sup> ファースの自殺研究については、拙稿 (杉尾 2012b) を参照されたい。

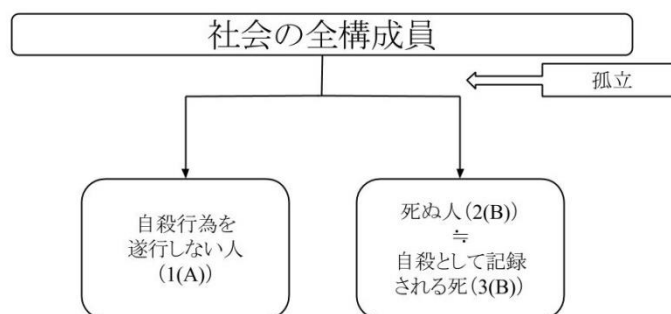
構造化されていない、ということの意味するだろう——そして、これは、自殺率の低さではなく高さに関連するだろう」(Firth 1961: 15-16)。

最後に、プロセスの第三段階であるステージ 3 を整理する。ここでは、ある個人による致命的自殺行為の公的記録化を妨げる社会の側からの働きかけ、つまり「隠蔽」が、公的にその死が記録されない (3(A)) / 記録される (3(B)) を左右する重要な社会的要因のタイプとなる。そして、前節で確認したように、このステージに関連する経験的調査の不足こそ、アトキンソンが自殺の社会プロセスモデルを文献調査に基づき提案した理由である。公式統計に依拠する研究者は、公式統計作成プロセスで発生すると想定される隠蔽について、全く分からない。例え彼らが公式統計の源泉である種々のレジスター (医療、警察、司法) の調査許可を得られたとしても、そこに記載されている情報から隠蔽についての証拠は得られない。それゆえ、公式統計に依拠する学術研究者にとって、隠蔽という社会的要因のある・なしは仮説の段階にとどまり続ける (Taylor 1982: 61) <sup>11</sup>。

### 3-2. 自殺の社会プロセスモデルに対する評価

アトキンソンは、前節で示した自殺の社会プロセスモデルの中に公式統計に依拠する自殺の社会学研究を位置付け、

図 2 公式統計に依拠する自殺モデル



両者を比較検討している。本節では、アトキンソンによる自殺の社会プロセスモデルの評価を確認する。加えて、現在の自殺研究で強調されている自殺行為の対他的性質という特徴に注目し、人類学における自殺研究を視野に入れ、このモデルを考察したい (図 2 参照)。

アトキンソンによれば、公式統計に依拠する自殺の社会学研究では、自殺者の母集団は 2(B)、つまり自殺行為の実行化による死者 (図 1 及び図 2 では「死ぬ人」と表記) とされる。そして、この 2(B) のデータである公式統計 (3(B)) が対照群としての 1(A) と比較され

<sup>11</sup> 筆者のフィジーにおける現地調査はフィジー警察による学術調査許可に基づき実施され、主要な調査資料はフィジー警察の自殺 (既遂及び未遂) 捜査記録から収集された。フィジーでは警察数値が自殺の公的数値であることを考慮すれば、筆者の調査環境はフィジーにおける自殺の公式統計作成プロセスとも言えるだろう (正確に言えば、筆者の調査環境はフィジー警察の自殺捜査記録プロセスであり、公式統計作成プロセスはその一部である)。つまり、自殺の社会プロセスモデルのステージ 3 の中で筆者は作業を実施していたことになる。このように調査を捉えた場合に興味深いのは、テイラーが公式統計に依拠する学術研究者にとっては仮説とせざるを得ないと指摘する隠蔽というテーマである。フィジー警察の自殺捜査記録プロセスでは、例えば、当初は事故や殺人とされた変死がそのように偽装された自殺であることを捜査が明らかにした事例が実際に発生していた。これらは、公的数値上は自殺として計上されたが、隠蔽というテーマに関係すると言えるだろう。

る。つまり、公式統計に依拠する自殺の社会学研究では、公式統計に含まれる自殺 (3(B)) が現実の自殺の全体 (2(B)) とされる。ここから、二つの特徴が導かれる。一つ目は、2(B) と 1(B)の違いが無視され、自殺未遂者 (2(A)) が除外される、という特徴である。二つ目の特徴は、3(B)は 2(B)を反映している、という想定である。この際、両者の違いは、無視されるか、あるいは公式統計の信頼性を巡る問題、つまり 3(B)がどれだけ 2(B)に接近しているのかという問題となる。更に、公式統計 (3(B)) におけるエラー、つまり数え漏れ (3(A)) は、ランダムな発生として処理される。以上から、公式統計に依拠する自殺の社会学研究は、三つのステージの A と B の差異の重要性を無視することの上に成立した自殺研究であるとされる (具体的には、1(B)、2(A)、3(A)の重要性が考慮されていないことになる) (Atkinson 1968: 89)。

さて、これら二つの特徴を備えた研究には、繰り返し検証されている一般的経験則がある。それは、自殺者 (2(B)) は自殺をしない人 (1(A)) に比べて「孤立」している、という命題として表現可能な研究成果である (Atkinson 1968: 89)。アトキンソンは、この研究成果について、「自殺についての大部分の社会的説明は、社会統合と自殺についてのデュルケム理論のヴァリエーション」 (Atkinson 1968: 89) であると述べる。つまり、アトキンソンは、公式統計に依拠する自殺の社会学研究が繰り返し検証してきた孤立と自殺に関する一般的経験則を、デュルケムが『自殺論』第二篇第二章及び第三章で論じた、社会統合の弱体化による「常軌を逸した個人化」 (デュルケム 1985: 248) から生じる「自己本位的自殺」、あるいは「自殺は、個人の属している社会集団の統合の強さに反比例して増減する」 (デュルケム 1985: 247-248) という命題のヴァリエーションとして位置付ける<sup>12</sup>。

他方、自殺の社会プロセスモデルでは、社会統合の弱体化に伴う個人の「孤立」は、三つのステージ全てにおいて、任意の個人が各ステージの A と B のどちらに進むかに大きな影響を及ぼすとされる。何らかの「応答」 (ステージ 1) や「介入」 (ステージ 2) があるためには、他者が存在していなければならないだろう。また、当人のために自殺という事実を「隠蔽」 (ステージ 3) してくれる他者の存在 (検死審問での評決が自殺かどうかということに気にかけてくれる人、など) は、自殺の公的記録化を左右する重要な要因となるだろう。「もしも、自殺プロセスのそれぞれの段階で、社会的孤立が A と B それぞれの母集団を実際に弁別するのなら、すぐに孤立と自殺の因果関係を推測しがちであったこれまでの社会学者は軽率過ぎたのかもしれない。彼らは、これら三つのステージが重要性を持つ可能性どころか、それらの存在すら、無視していたからである」 (Atkinson 1968: 90)。このように、アトキンソンは、公式統計に依拠する自殺の社会学研究が孤立と自殺の関係を単純化し過ぎてきた点を批判する。

以上、アトキンソンによる自殺の社会プロセスモデルの評価を整理した。以下では別の観点からこのモデルを考察したい。それは、既に触れたステージ 1 とステージ 2 の類似性と違いという問題に関係する。これら二つのステージは、自殺のサイン、警告、メッセージなどの「助けと希望を求める他者への訴え」 (コブラーとストットランド) という自殺行

---

<sup>12</sup> 公式統計に依拠する自殺の社会学研究が、このようにデュルケム自殺理論を社会的統合が自殺を抑止するという「統合の理論」としてのみ理解してきたという指摘もある (e.g., ヘンディン 2006: 45-46; 中 1979: 390-391)。

為の前段階から、自殺行為を経て、自殺行為の結果までの一連のプロセスを含む。そして、この中心には、ステンゲルが「アピール」と名付け、後に、ファーブロウとシュナイドマンが「助けを求める叫び」と呼称した自殺の対他的性質という特徴がある（ここでは、このような自殺理解を「自殺の Cry for help モデル」とする）。この特徴は、自殺未遂（非致命的自己破壊行動）を主要な研究対象としながら、「オペラント」（Bostock & Williams 1975）、「敵意」（Lester 1968）、「脅し」（Siegal & Friedman 1955）、「操作」（Sifneos 1966）、「ジェスチャー」（Stanley 1969）など、様々な概念として論じられてきた。そこでは、自殺行為者の意図は、彼／彼女を取り巻く社会関係の修復や改善とされ、自殺行為はコミュニケーションと捉えられる傾向にある（e.g., Lester 2001）。

更に、自殺の Cry for help モデルは、上記の西欧諸社会を対象とした研究に限定されず、非西欧諸社会を対象とする人類学における自殺研究でも採用されてきた。人類学では、自殺は、侮辱や恥を被った個人が、自分の陥った苦境を改善するためにその原因となる他者に危害を加えるための行為という意味で、復讐自殺として一般化されている（杉尾 2012b）。復讐自殺は、当人にとっては既に混乱している社会関係を矯正するための積極的な現実への働きかけとされ、「政治的戦略」（Counts 1984）、「戦略」（Healey 1979）、「弱者の武器」（Jorgensen 1983）、「自殺的冒険」（Firth 1961）、「抗議声明」（Stewart & Strathern 2003）など、様々な概念として論じられてきた。つまり、自殺の人類学研究でも、自殺行為はコミュニケーションと捉えられる傾向にある<sup>13</sup>。

ここでは、自殺の社会プロセスモデルと自殺の Cry for help モデルの相違点として、前者では自殺行為とその結果が明確に区別されているのに対して、後者ではその区別が不明瞭である点に注目したい。つまり、自殺の社会プロセスモデルのステージ 1 とステージ 2 の区別が、後者では維持されていない。そのため、自殺の Cry for help モデルでは、自殺行為の対他的性質が強調され、自殺行為が「助けと希望を求める他者への訴え」の実行化であると同時にその達成化とされる傾向にある。このタイプの自殺理解は、既にステンゲルに現れている。彼は、アピールの現実的効果として、自殺行為の結果が非致命的な場合の多くで、自殺行為以前には混乱していた彼／彼女を取り巻く社会関係が大きく改善される傾向にある点を強調した（e.g., Stengel 1970: 109-112）。

自殺の社会プロセスモデルと自殺の Cry for help モデルを比較するという作業は、些細な論点であると思えるかもしれない。しかし、これは、現在の一般的な自殺理解に現れている歪みとして明確化されるべき論点であるとも言えると思われる。例えば、ウィリアムズは、自殺が「単なる」助けを求める叫びに過ぎないと見なされる傾向が現在一般化している点に注意を促す。そのような理解は、自殺行為者は自分が置かれた状況や周囲の他者を自分の望み通りに変更したいだけである、あるいは自殺行為とはこのような目的の達成手段である、と表現可能な自殺理解である。その結果、現在では、「助けを求める叫び」と

<sup>13</sup> また、筆者の現地調査によれば、フィジーの自殺行為に関しても、特に警察記録上は自殺未遂として計上されている事例で、コミュニケーション的と見なすことが可能な性質が多く記録されている（e.g., 杉尾 2011, 2012a, 2013b）。それは、例えば、家族成員の面前で自己破壊行動を実行したり、自己破壊行動の実行直後に、家族に助けを求めたり、友人に電話をかけるなどの事例に現れていると言えるだろう。

いう対他的性質は主に自殺未遂に対応付けられ、自殺未遂は生き残るために実行される他者の戦略的操作とされる傾向にある (Williams 2001: xv-xvi)。

ウィリアムズは、この歪みを修正するために、「助けを求める叫び」の代替概念として「痛みの叫び (Cry of pain)」を提案した (Williams 2001: 136-154)。「痛みの叫び」は、「アピール」と「助けを求める叫び」の双方が本来意味した自殺行為の対他的特徴を中立的に示すための概念とされる。ウィリアムズに従えば、アピール及び助けを求める叫びは、他者の戦略的操作を意味しない。その対他的性質は、例えば膝を机にぶつけた時に感じる身体的痛みに対して思わず口にする「痛い」という叫びと同じく、精神的痛みに対して思わず発せられる「痛み」の「叫び」である。それゆえ、「痛みの叫び」としての自殺行為はその結果 (非致命的か、致命的か) を含まず、この叫びは自殺未遂に限定される特徴とはならない。言い換えれば、ウィリアムズが提案した「痛みの叫び」が意味するのは、社会プロセスモデルがするように、ステージ 1 とステージ 2 の間に明確な区別を導入することとして捉えることができるだろう。

本章を要約する。アトキンソンは、1968年の論文で、自殺を社会プロセスとして捉えるモデルを提案した。自殺の社会プロセスモデルは、自殺行為の前段階、自殺行為とその結果の間の段階、自殺行為の結果とその記録の間の段階、という三つのステージから構成される。各ステージは、順に「応答」、「介入」、「隠蔽」というそれぞれが固有の社会的要因に依存し、その結果、自殺は複雑な社会プロセスとして現れる。1968年の論文におけるアトキンソンは、公式統計に依拠する自殺の社会学研究に対して、孤立と自殺の関係を単純化してきたという評価を与え、複雑な社会プロセスの中で自殺を捉える必要性を強調した。実際、このモデルには様々な自殺研究を含めることが可能である。例えば、ファーブロウとシュナイドマンによって提案された「助けを求める叫び」や最近提案されたウィリアムズによる「痛みの叫び」などを巡る自殺研究 (自殺学) における議論も、このモデルを参照することで理解が深まると思われる。加えて、ファースの自殺研究や復讐自殺という自殺概念などの人類学における自殺研究の成果、あるいは筆者自身の現地調査資料なども、このモデルに組み込むことができると思われる。以上から、自殺の社会プロセスモデルは、人類学を含む自殺研究の一般的枠組みとしての役割を十分果たすと考えられる。

#### 4. アトキンソンによる自殺の社会プロセスモデルの撤回とその背景

##### 4-1. 自殺の公式統計作成プロセスに関する経験的調査

アトキンソンは、自殺の社会プロセスモデルを提案後、自殺の公式統計作成プロセスについての経験的調査を実施した。その目的は、ダグラスが議論によって展開した自殺の公式統計に関する問題を、経験的に検証することにある。そして、その後、アトキンソンは、その調査結果を考察する中でこのモデルを撤回した。本節では、アトキンソンが公式統計作成プロセスの経験的調査から導き出した論点を整理する。そして、次節では、自殺の社会プロセスモデルの撤回という、アトキンソンによる自己批判的作業の背景となる議論を明らかにする。

既に確認したように (本稿 2-1 を参照)、ダグラスは、公式統計が、現実には発生した自殺

の客観的集計作業に基づく数的表現ではなく、その作成プロセスに関与する人々が共有する自殺に関する常識的知識という人為的基準に支配された記録の数的現われである可能性を、議論によって強く示唆した。ダグラスに従えば、公式統計に記録される自殺に対応するのは、客観的基準に従って測定された現実の自殺ではなく、公式統計作成者の間で暗黙裡に想定されている常識的自殺観に含まれる変死であるかもしれない。アトキンソンは、このようにダグラスが示した自殺の公式統計に対する強い懐疑を、イギリス（イングランドとウェールズ）の検死官（Coroners）及びそのスタッフ（Coroner's officers）という公式統計作成プロセス関与者（以下、単に「検死官」とする）による自殺の認定プロセスについての経験的調査を通して検証した。

自殺の認定プロセスは、自殺の疑いのある変死における動機の探求プロセスであり、死の意図性の確立という法的要請に基づく（Atkinson 1978: 143）。アトキンソンによれば、検死官による自殺の認定プロセスが意味するのは、自殺の法的定義（公的定義）を自殺の疑いのある個別的事例（変死）に体系的に適用するという、検死官による日常の実践プロセスではない。なぜなら、自殺とは何か、つまり自殺の定義付けに関して、この認定プロセスに参加する検死官にとっての固有の意味が不明瞭だからである。法律文献からは自殺が「行為の自発性」と「死の意図性」という二つの基準により定義されていることは確認できるが、検死官用の法律ガイドブックには、自殺の認定プロセスで検死官が通常参照すべき形式として自殺は定義されていない。それゆえ、自殺の公式統計作成プロセスの中心的役割を担う検死官による自殺認定プロセスを、彼らによる公的自殺定義の個別的事例への体系的適用、つまり形式的定義とその操作化（操作的定義）の問題として、単純に論じることではできなくなる（Atkinson 1978: 89-90）。

この論点を明確にするために、アトキンソンはある検死官に言及する。この検死官は、自殺の法的定義をアトキンソンに尋ねられても即答できなかった。その代わりに、この検死官は、「ここに書いてあるはずだが」と言いながら検死官用の法律ガイドブックに目を通し（そこに自殺定義は書かれていない）、「今は見つけることができなかった」とそれを閉じた。そして、「定義はとても簡単なものさ」と言い、少し躊躇した後、「精神が不安定な中での死」と自殺を定義した。アトキンソンは、このやりとりから以下の三点を指摘する。一つ目は、ハンドブックと検死官が共に自殺の定義を自明としていることである（それゆえ、自殺の定義はハンドブックに明記されないし、検死官はそれを直に返答できなかった）。二つ目は、自殺の定義を即答できなかった検死官は自殺を含む変死の分類を日常的に実践しているという事実である。そして、三つ目は、この検死官が最終的に口にした自殺の定義は上記の「行為の自発性」と「死の意図性」という二つの基準を共に含んでいないことである（Atkinson 1978: 90-91）。

さて、公式統計作成プロセスを統計作成関与者による自殺定義の個別的事例への適用（形式的定義とその操作化の問題）として論じる場合、公式統計作成プロセスについての学術研究は、この検死官を定義の事例への適用（操作化）の失敗を示す証拠と見なすかもしれないし、この人物の検死官としての能力を批判するかもしれない。しかし、アトキンソンはこの種の批判を疑問視する（Atkinson 1978: 92）。アトキンソンに従えば、自殺の認定プ

プロセスで問題とすべきは、自殺の公的定義を知らない役人が個別事例を選別している（それゆえ、公式統計の学術的資料価値はない）、という点ではない。自殺の公式統計作成プロセス研究によって解明されなければならない問題は、それにもかかわらずこのプロセスが組織的かつ一貫した日常実践として現実に存在しているという点にある。言い換えれば、先に参照した検死官は自殺の公的定義を即答できないが故に批判されるのではなく、知らないにもかかわらずこの人物が検死官であり続けることを可能とする条件こそ解明されなければならない。自殺の公式統計作成プロセスで注目すべきは、その実践が、曖昧さや不確実さによって問題含みであることではなく、秩序化され問題なく日常的に営まれている点であるとされる（Atkinson 1978: 107）。

検死官による自殺の認定プロセスは、死の意図性の有無を事後的推論に基づいて決定するプロセスであり、ここでは客観的証拠（事実）に基づく決定であることが要求される。アトキンソンは、自殺の認定プロセスでは、死の意図性の事後的推論の枠組みとして、特定の客観的事実が自殺の「手掛かり（cues）」としてパターン化されている点に注目する（Atkinson 1978: 112）。この手掛かりは「遺書と脅迫」、「方法」、「状況」、「生活史」、という四つのタイプから構成される。これらの事実が自殺の手掛かりであることは自明な想定とされ、「遺書と脅迫」、「方法」、「状況」の三つは「典型的自殺」を、「生活史」は「典型的自殺者の生活史」を、それぞれ自明の想定として内に含む。例えば、遺書は自殺者の死の意図性を最も直接的に示す事実であり、首吊り（縊死）は自殺に固有の死の方法であり、自殺は人目につかない場所で実行され、自殺者は何らかのトラブルを抱えそれは特に精神的病である、などが暗黙裡に想定される。これらの手掛かりは、単独で自殺者の死の意図性を一義的に確定する証拠になるというよりも、他の手掛かりと関連付けられることで死の意図性の強度を示唆することに貢献する（Atkinson 1978: 110-141）。

ここでは、自殺の認定プロセスは、検死官が、これらの証拠（事実）を自殺の手掛かりとしながら、問題となる変死における当事者の死の意図性を事後的に推論し、それらの手掛かりと矛盾しないようなその死の「説明モデル」を構築するプロセスとなる（Atkinson 1978: 141）。これは、自殺の公式統計の学術的資料価値に大きな影響を及ぼす。

「明らかに、この種の分析〔自殺認定が検死官による自明の想定に基づく推論プロセスであるという分析〕が検死官記録に由来するデータとの相関的作業に依存する自殺調査に対して持つ意味合いは非常に深刻である。婚姻ステータス、精神的病、アルコール中毒、経済危機などの変数と自殺の関係を示すことによって調査者が行っていることは、恐らく、検死官が日常業務で暗黙裡に使用する説明を明示的に行っているだけだろう。実際、…証拠は、検死官が自殺の意図の指標として利用する〔自殺の〕手掛かりは、専門家が自殺を説明しようとする際に引き合いに出す変数ととても良く似ている（〔〕内引用者）」（Atkinson 1978: 143-144）。

更に、アトキンソンは、自殺に関する新聞報道の調査に基づき、自殺の説明モデルを構築する際に検死官が依拠する想定が、公式統計作成プロセス内部でのみ通用する知識ではなく、検死官（公式統計作成プロセス関与者）が属する社会全体の中で自明とされている



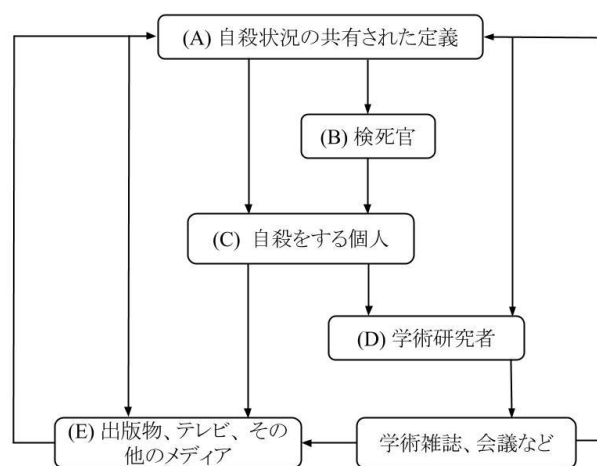
自殺に関する常識的知識であることを明らかにした。新聞における自殺報道は、検死官と類似した自殺の説明モデルを共有している。自殺に関する多くの新聞報道では、自殺の原因を説明する際、「うつ」や「精神の不安定さ」などが参照されるという「素人精神医学的な理論化」が行われている (Atkinson 1978: 160)。あるいは、「孤独」、「結婚・家庭関係の崩壊」、「アノミー」などの社会統合に関する「素人デュルケム的な理論」が利用されている (Atkinson 1978: 168)。

また、新聞報道に現れている自殺のパターン化は、「病(病の心配)→不安定な精神状態→自殺」や、「社会的孤立(低レベルの家族統合)→うつ→自殺」などの心理的要因を媒介変数とする自殺の説明モデルであり、検死官による「何らかのトラブル→自殺」という常識的知識に基づく説明モデルと類似した推論に基づく (Atkinson 1978: 165-171)。そして、これら自殺の新聞報道では、身体的病や精神的病の病歴、自殺に先立つ警告、「彼/彼女は自殺の直前には元気になっていた」という自殺直前の様子、社会統合の欠如など、通常は専門家(自殺の学術研究者)の発見とされる事実が常識的知識として利用されている (Atkinson 1978: 143, 168)。学術研究者による自殺の理論化は、これらの常識的知識に基づく自殺の説明モデルに比べて心理的要因と社会学的要因の違いを明確する傾向にあるが、「何らかのトラブル→自殺」、より正確には「社会的/心理的トラブル→心理的状态→自殺」という常識的知識に基づく推論プロセスは、両者の間で共有されている (Atkinson 1978: 170)。

以上から、アトキンソンは、常識的知識との関連で自殺を理解する枠組みとして、「共有された自殺定義の社会システムを通しての伝達に関する力動モデル」を提案した (図3参照)。

アトキンソンに従えば、自殺についての常識的知識は、統計作成プロセス関係者(例えば検死官)、専門家(例えば社会学者)、一般の人々など、さまざまな社会集団の間で共有され、各集団間での相互影響により変動する。ある社会のある特定の時点で広く普及している自殺の常識的知識である「自殺の状況についての共有された定義(A)」は、「検死官(統計作成プロセス関係者)(B)」、「自殺をする個人(自殺企図者)(C)」、「学術研究者(D)」及び研究報告、「メディア関係者(E)」などに共有され、自殺に関する常識的知識は様々な集団間での相互作用によって維持・修正され続ける。また、この相互作用には上記力動モデルで明示されていない要因も関係する。それは、例えば、

図3 共有された自殺定義の社会システムを通しての伝達に関する力動モデル



(Atkinson 1978: 145)に基づき作成

共有された定義(A)は、「検死官(統計作成プロセス関係者)(B)」、「自殺をする個人(自殺企図者)(C)」、「学術研究者(D)」及び研究報告、「メディア関係者(E)」などに共有され、自殺に関する常識的知識は様々な集団間での相互作用によって維持・修正され続ける。また、この相互作用には上記力動モデルで明示されていない要因も関係する。それは、例えば、

文学、芸術、宗教、映画、テレビなどの影響である。更に、「自殺をする個人（自殺企図者）(C)」にとって、この知識は単に共有されるだけではなく、自己破壊行動の実行にも関与している可能性が示唆されている (Atkinson 1978: 145-146)。

#### 4-2. 調査結果の捉え直しと社会プロセスモデルの撤回

アトキンソンによる自殺の公式統計作成プロセスに関する経験的調査結果は、ダグラスによる自殺の公式統計に対する懐疑を経験的に裏付けているように思われる。つまり、検死官による自殺認定プロセスは、自殺に関する常識的知識を参照枠組みとして組織的に営まれる秩序だった実践であり、自殺の公式統計は、そのような実践の数的表現であるように思われる。そして、この場合、公式統計に依拠する自殺の社会学研究は、客観的事実である自殺を測定した結果である公式統計に基づき自殺を説明しているとは言えなくなる。なぜなら、その説明（理論）の対象である記述（公式統計）それ自体に、当の説明が含まれているのであり、記述は純粋な客観的事実性を表示していない可能性があるからである。つまり、「自殺学者によって引き合いに出される全てのあるいはほとんどの「原因」は、実際には、自殺の「記述そのものに含まれている」のである——それは、地元新聞のコラムに見出されるような平凡な「事実に基づく」報告においてすら、報告されている自殺についての理論的解釈や可能な説明が充満しているほどである（斜線強調は原著）」(Atkinson 1978: 172)。しかし、アトキンソンは、自分自身の経験的調査結果を考察する中で上記の力動モデルを批判し、同時に、前章で整理した自殺の社会プロセスモデルを撤回するに至った。本節では、アトキンソンが自殺の社会プロセスモデルを撤回した背景となる議論を明らかにする。

前節で示された力動モデルは、自殺の公式統計の学術的資料価値を巡る問題に答を提示しているように思われる。しかし、アトキンソンは、公式統計作成プロセスの経験的調査から自殺の公式統計の実証性（学術的資料価値）に明確な判断を下すことはできない点を強調する。例えば「うつ」のような統計情報が現実における自殺の特徴なのか自殺に関する常識的知識の反映なのか、言い換えれば、公式統計作成者が従ったのは公的定義なのか常識的知識なのか、経験的調査からこのような問題に明確な答えを導き出すことはできない。なぜなら、同じ記述を完全に異なって解釈することが可能であり、「どちらの解釈が「正しい」のか、実際に「正しい」解釈があるのか、あるいはそのような結論に到達するためにどんな手順が採用されるのか、これらのことは不明瞭である」(Atkinson 1978: 156) からである。

アトキンソンは、上記の問題を踏まえ、「どちらが決定するのか」という問いの枠組みを変更することによって自分自身の経験的調査結果を捉え直す。そして、自殺認定の際に依拠される常識的知識が自殺の認定それ自体によって現れる、あるいは、より一般的に表現するならば、記述に与えられる説明それ自体が記述によって遡及的に示される、と表現可能な記述と説明の捉え方を採用する。その際、アトキンソンは、ガーフィンケルやサックスによるエスノメソドロジーの知見を参照しながら、この現れ方（示され方）そのものに固有のパターンを記述の規則性として位置付ける。この意味での規則性は、経験的世界に予め何らかの秩序を想定し、その想定された秩序によって経験的世界に由来する記述を説

明する、という意味での記述の一般化とは区別される (Atkinson 1978: 175-197)。

この場合、公式統計に依拠する自殺の社会学研究における研究成果は、自殺についての常識的知識が単に学術的に表現し直されたものとはならない。また、同時に、専門的知識に基づく自殺の説明は、常識的知識に基づく自殺の説明よりも優れているのでも正確であるのでもない。両者は、同じ記述が遡及的に示す互いに異なる(自殺に関する社会的知識と常識的知識に基づく自殺に関する)二つの説明として、つまり二つの異なる規則性として、積極的に捉え直される (Atkinson 1978: 184-186)。以上のような観点から、アトキンソンは、死のカテゴリー化における規則性の発見に向けての経験的調査を、自殺の社会学研究の方向性として示した<sup>14</sup>。

さて、アトキンソンは、自殺研究を以上のように方向付ける際、特に社会決定論を問題視する。なぜなら、社会決定論は、経験的世界に予め自殺の社会的原因を想定し、その想定された原因によって経験的世界で発生した自殺を説明すること、つまりアトキンソンが否定した一般化という説明方法だからである。そして、この文脈において、力動モデルに対する批判、及び本稿の考察対象である自殺の社会プロセスモデルの撤回、という自己批判的作業が行なわれた。アトキンソンは、常識的知識が社会全体でどれほど複雑に流通しようとも、自殺の認定が常識的知識によって「決定される」と捉えられる限り、力動モデルは複雑な社会プロセスを自殺の原因とする社会決定論に過ぎないと述べる (Atkinson 1978: 148)。また、同じ理由から、アトキンソンは自殺の社会プロセスモデルを撤回する。当初、自殺の社会プロセスモデルを構成する三つのステージ全てで「社会的孤立」が決定的役割を果たすという特徴が、このモデルのデュルケムの自殺研究に対する批判の論拠とされた。しかし、この特徴は、批判の論拠ではなく、社会統合と自殺に関するデュルケム理論に新しい媒介変数を加える作業として捉え直される。そして、このような理由から、アトキンソンは、自殺の社会プロセスモデルを、自殺率と社会統合の因果関係を複雑化したデュルケムの社会決定論であるとして撤回するに至った (Atkinson 1978: 175-76)。

アトキンソンの強調点は、表2と表3を比較することで明瞭になると思われる。表2では、デュルケム『自殺論』第二編第二章「自己本位的自殺」で論じられたカトリックとプロテスタントの自殺率の差異が、社会統合という媒介変数の強弱として説明されている。他方、表3では、自殺の社会プロセスモデルは、表2に対応させながら、複雑化した社会統合モデルとして位置付けられている。

<sup>14</sup> アトキンソンによる公式統計作成プロセスについての経験的調査は、次のようにサックスが提起した研究方法に従ったものと位置付けることができるだろう。「自殺があったという決定が組み立てられるのはどのようにしてかについての探索、「自殺をする」とそれを語るために対象はどのように把握されるべきかについての探索、これらが社会学にとっての端緒となる問題である。自殺分類をどう組み立てるかについての手続き的な記述を産出すると、興味深い社会的問題を構成するのはカテゴリーとその適用の方法論であるということがわかるであろう(句読点は改変)」(サックス 2013: 89の注14)。なお、アトキンソンの示した自殺研究の方向性それ自体は、自殺の社会プロセスモデルの再評価(肯定的な捉え直し)という本稿の目的を超えるテーマである。ここでは、アトキンソンがエスノメソドロジーを視野に入れた死のカテゴリー化研究を自殺の社会学研究の方向性として示した点を確認するに留めたい。

表 2 デュルケムの「媒介変数モデル」 表 3 アトキンソンの「社会プロセスモデル」

変数の分類	独立変数	媒介変数	従属変数	変数の分類	独立変数	媒介変数	従属変数
カテゴリー	宗教	社会統合	自殺率	カテゴリー	社会的要因	社会統合	自殺率
内容	カトリック	強	低	内容	応答	強	低
	プロテスタント	弱	高		介入	強	低
					隠蔽	強	低

(黒田 2006:33-34) に基づき作成

本章を要約する。アトキンソンは、自殺の社会プロセスモデルを提案後、自殺の公式統計作成プロセスについての経験的調査を実施した。アトキンソンが経験的調査から引き出したのは、自殺の公式統計の学術的資料価値の否定ではなく、その価値の経験的評価の不可能性だった。アトキンソンは、この問題を解決するために、エスノメソドロジーの知見を参照しながら、経験的世界の捉え方を一般化から規則性の発見へと変更した。この場合、一般化とは、経験的世界に予め何らかの原因を想定し、その想定された原因によって経験的世界に由来する記述を説明することを意味する。それに対して、アトキンソンは、経験的世界に固有の記述のパターン化の方法を規則性と位置付け、経験的世界における死のカテゴリー化の規則性の発見を自殺の社会学研究の方向性として示した。そして、この際、自殺の社会プロセスモデルは社会決定論であるという理由から撤回されるに至った。なぜなら、社会決定論は、経験的世界に予め自殺の社会的原因を想定し、その想定された原因によって経験的世界で発生した自殺を説明すること、つまり規則性の発見ではなく記述の一般化に基づく説明方法と見なされるからである。

## 5. デュルケム『自殺論』における「逆倒的な方法」と自殺の社会プロセスモデル

### 5-1. デュルケム『自殺論』における「逆倒的な方法」

アトキンソンは、死のカテゴリー化研究を自殺の社会学研究の方向性として示す中で、自殺の社会プロセスモデルを撤回するに至った。しかし、3章で考察したように、自殺の社会プロセスモデルは、人類学を含む多様な自殺研究を含むことが可能な、自殺研究の一般的枠組みとしての可能性を持つ。本章では、自殺の社会プロセスモデルを自殺研究の一般的枠組みとして捉えるために、アトキンソンがこのモデルをデュルケムの社会決定論として撤回した点に注目したい。そして、デュルケムの自殺研究に社会決定論とは異なる位置付けを与えることによって、自殺の社会プロセスモデルを再考したい。具体的には、デュルケムが『自殺論』の方法論として第二編第一章で論じる「逆倒的な方法 (méthode renversée)」に注目し議論を展開する。本節では、逆倒的な方法を、ダグラスによる批判を通して整理し、その批判の論点がアトキンソンの言う社会決定論に対応することを確認する。そして、次節では、ダグラスが考慮していない逆倒的な方法の二つの特徴に注目し、逆倒的な方法を、社会決定論とは異なる意味で、自殺の社会的原因の実在性に基づく方法

として捉え直す。本章では、以上の作業手順に従い、アトキンソンとは異なる視点から自殺の社会プロセスモデルを再考し、このモデルが持つ自殺研究の一般的枠組みとしての可能性を示す。

ダグラスは、デュルケム『自殺論』を実証主義的レトリックとして批判している (Douglas 1967: 21-22)。ダグラスによれば、デュルケム『自殺論』では、自殺の統計的記述に社会学的説明が与えられているが、説明のための社会理論は記述によって検証されるのではなく、理論に適合するように記述が歪められている (Douglas 1967: 25)。ダグラスは、この主張を裏付けるために、『自殺論』の方法論として示された第二編第一章における「逆倒的な方法」を挙げる。そして、この方法では、通常の科学的方法における統計的記述（一般的経験則）とその原因を説明する理論（普遍的因果法則）の関係が逆転している点に注目する (Douglas 1967: 25)。通常は、何らかの基準に従いながら観察可能なデータが収集され、続いてその原因を説明する理論がその記述に基づき検証されなければならない。つまり、「データの形態学が確立され、その後、その原因が求められる」 (Douglas 1967: 25) という順番にならなければならない。しかし、逆倒的な方法では、統計的記述から独立して普遍的に妥当する社会的原因が先取的に想定されている。ダグラスは、このような理由から、逆倒的な方法（デュルケム『自殺論』）を、普遍的に妥当する社会的原因が統計的記述から独立して先取的に想定されているという意味で、実在論的自殺研究と位置付ける (Douglas 1967: 29-33)。ダグラスは、デュルケムがこのようなレトリックを採用した理由を、社会学固有の研究対象である社会の実在性を科学（実証主義）的に示した結果であると述べる (Douglas 1967: 22)<sup>15</sup>。

次に、デュルケムによる逆倒的な方法に関する議論を実際に見てみたい。デュルケムは、「できるだけ多くの自殺を観察し、記述すること」 (デュルケム 1985: 161) の必要性を、議論の初めに確認する。しかし、それに続いて、その種の記述はデュルケムが「正気の自殺」とする自殺の場合には利用できないと述べる。

「しかしあいにく、正気の自殺を、その形態学的な形式もしくはその特徴に照らして分類することはできない。必要な資料がほとんどまったくないからである。じっさい、この分類にとりかかるためには、多数の個別的事例についての正確な記録がなければならないであろう。…ところが、この種の記録がのこされているのは、ほとんど精神病患者の自殺の事例にかぎられている。[第一編第一章において] 精神病を決定因とする自殺のおもないくつかのタイプを構成することができたのは、とりもなおさず、精神科医たちによって収集

<sup>15</sup> テイラーもまた、ダグラスと同じ理由から、デュルケム『自殺論』を実在論的自殺研究として捉える可能性を示している (Taylor 1982: 3-21)。しかし、テイラーは、ダグラスとは逆にその方法を肯定的に評価し、そこから構造論的自殺研究を発展させた (Taylor 1982: 161-193)。このような実在論的自殺研究というデュルケム『自殺論』の位置付けは、例えばヴァーティの研究にも見られる (Varty 2000: 54-55)。他方、次節の議論から導かれる意味で逆倒的な方法を捉えた場合、それはバスカーの言う実在論と関連付けることができるかもしれない (e.g., Bhaskar 2008)。ただし、本章で逆倒的な方法に注目するのは、自殺の社会プロセスモデルの再考という本稿の目的を達成するためであり、実在論それ自体の考察はその目的を超えることを改めて確認しておきたい。

された観察例や記録のおかげなのである。その他の自殺については、まったくといってよいほど情報が欠けている（[] 内引用者）」（デュルケム 1985: 161-162）。

そして、デュルケムは、自殺の記述を引き起こした原因を分類し、この原因論的分類に対応させて形態学的分類（記述の分類）を構成する、という研究手順を提案する。

「しかし、それとは別の方法によって目的を達することができる。研究の手順を逆にしてみればよいのだ。自殺のいろいろなタイプは、実際には、それを規定している原因そのものの多様性に応じた数だけしか存在しない。…とすれば、われわれは、あらかじめ記述された自殺の特徴にしたがって直接に分類しなくとも、それらを引き起こした原因を分類することによって、自殺の社会的タイプを構成することができる。…ひとくちに言えば、筆者の分類法は、形態学的ではなく、はじめから原因論的なのだ。なお、それはこの方法が劣っているということではない。なぜなら、現象の原因を知っているときには、ただたんに現象の特徴——たとえそれが本質的なものであっても——を知っているだけのときよりも、いっそう鋭く現象の本質に迫ることができるからである」（デュルケム 1985: 162-163）。

最後に、デュルケムは、このように提案された自殺の記述とその原因（理論）の関係を「逆倒的な方法」と名付ける。そして、この方法が自殺の社会学研究にとって唯一かつ最適な方法であると主張する。

「あらゆる点からみて、この逆倒的な方法は、筆者の提起した特殊な問題を扱うのに適した唯一の方法である。じっさい、ここで研究するのは、社会的自殺率であるということをおぼえてはならない。それゆえ、われわれの関心の対象となるべき自殺のタイプは、社会的自殺率の形成にあずかるタイプ、またその自殺率の増減をうながすタイプにかぎられる。ところが、自殺の個人的形態がすべてそのような属性をおびていることが証明されているわけではない。…自殺の個々の事例を、たとえどれほど完全に記述してみたところで、どのみちどれが社会的特性をもった自殺であるかを知ることはできない。…要するに、全体から部分へすすんでいかなければならないのだ」（デュルケム 1985: 164-165）。

ダグラスは、デュルケムが以上のように逆倒的な方法を論じる際、それが自殺の記述不足を埋め合わせるための苦肉の策として導入されたのにもかかわらず、議論の最後では、突然に唯一の最適な方法とされている点に注意を促す（Douglas 1967: 28）。そして、記述とその原因（理論）の関係を部分と全体の関係と捉え、次のように述べる。

「この重要な『自殺論』からの一節で、デュルケムは、部分についての知識は全体の知識から生じなければならぬと主張する。しかし、もしも、デュルケムが方法論的理念『社会学的方法の規準』（デュルケム 1978）の中で主張するように、部分についての知識から全体についての知識に進まなければならぬならば、どのようにして部分を知るに先立っ

て全体を知ればいいのか。端的に言えば、不可能である（[] 内引用者）」(Douglas 1967: 28-29)。

このようなダグラスによる逆倒的な方法（デュルケム『自殺論』）の位置付けは、アトキンソンが自殺の社会プロセスモデルを撤回する際に主張した社会決定論というデュルケム『自殺論』の位置付けに対応している。なぜなら、社会決定論は、経験的世界に予め自殺の社会的原因を想定し、その想定された原因によって経験的世界で発生した自殺を説明すること、とされたからである。そして、引用済み箇所述べられているように（本稿 2-2 を参照）、アトキンソンは、デュルケム『自殺論』が公式統計に依拠する自殺の社会学研究の古典とされている理由を、デュルケムが「発見された統計的差異の理由を説明するために一連の法則的命題を構築することに成功したこと」(Atkinson 1978: 18) に求めた。この場合、デュルケム『自殺論』は、経験的世界に由来する統計的記述を説明するために想定された普遍的に妥当する社会的原因によって、当の記述を説明するという意味で、社会決定論という位置付けが与えられていると言えるだろう。

## 5-2. 「逆倒的な方法」に基づく自殺の社会プロセスモデルの再評価

前節では、ダグラスが、「逆倒的な方法」を論拠としながら、デュルケム『自殺論』を普遍的に妥当する社会的原因が統計的記述から独立して先取りの想定されているという意味で実在論的自殺研究と位置付けたこと、そして、このようなダグラスの議論はアトキンソンが自殺の社会プロセスモデルを撤回する際に主張した社会決定論というデュルケム『自殺論』の位置付けに対応すること、これら二点が確認された。本節では、逆倒的な方法を社会決定論とは異なる方法として捉え、これら二つの異なる視点から自殺の社会プロセスモデルを比較検討する。そして、自殺の社会プロセスモデルは、前者（逆倒的な方法）の視点に立つ場合、自殺研究の一般的枠組みとして位置付けられることが可能であることを示す。

議論の出発点として、前節で確認したダグラスによる逆倒的な方法への批判では、この方法における二つの特徴が考慮されていない点に注目したい。これら二つの特徴の一つ目は、前節で引用済みの箇所で言及されているように、デュルケムが、自殺の社会的タイプ（一般的経験則）の構成を可能とする記述の重要性を認め、自殺の社会的原因（普遍的因果法則）の探求のために積極的に利用している点である<sup>16</sup>。ただし、その種の記述は「精神科医たちによって収集された観察例や記録」など、記録が多数で正確な場合に限定される（デュルケム 1985: 161-162）。二つ目は、逆倒的な方法が、経験的世界の自殺を説明するために先取りの想定された普遍的に妥当する社会的原因による説明、つまり自殺の社会決定論と見なすことはできないという点である。これは、デュルケムが逆倒的な方法の難点と呼ぶ問題と関連する。デュルケムによれば、逆倒的な方法は、自殺の現象的分類の多様性、つまり自殺の社会的タイプ分けには対応できるが、「タイプの特有の性格」（デュル

<sup>16</sup> 自殺の社会的タイプと自殺の社会的原因は、それぞれ「現象の特徴」と「現象の原因」と呼ばれる（デュルケム 1985: 163）。

ケム 1985: 163)、つまり各現象的分類に固有の社会的原因を明らかにすることはできない(デュルケム 1985: 163)。

デュルケムによるこの問題への対処法が、経験的世界の自殺を説明するための普遍的に妥当する社会的原因の先取りの導入、つまり社会決定論であると見なされることができないのは、次の記述から明らかであると思われる。そこでは、自殺の原因は、自殺の資料(事例)を説明し尽くすどころか、それが想像の産物ではないことを確認するために資料(事例)の助けを必要とすることが強調される。

「もっとも、[逆倒的な方法の] この弱点は、少なくともある程度まで避けることができる。ひとたび原因の性質が明らかになれば、そこから結果の性質の演繹を試みることができようし、その結果は、それがそれぞれの原因に根ざしているということだけからも同時に性格づけられ、分類されるであろう。そのさい、かりにこの演繹がなんの事実にもみちびかれずに行なわれれば、たしかに純粋な空想の綾に終わってしまうおそれがある。しかし、自殺の形態学についての利用可能な若干の資料の助けをかりて、この演繹のみちびきの灯とすることができるであろう。その情報も、それだけではあまりにも不完全であり、不正確であるため、分類の原理を示してはくれないが、いったん分類の枠組が確立されれば、有効に利用することができるにちがいない。それらは、演繹がどの方向に向けられるべきかを示唆してくれようし、また、それらの提供してくれる事例によって、このように演繹的に構成された種が、頭のなかの想像物でないことを確認することもできるであろう(〔内引用者〕)(デュルケム 1985: 163-164)。

以上の二点は、ダグラスによる逆倒的な方法への批判に対する問題提起となる。なぜなら、ダグラスに従えば、デュルケム『自殺論』は、記述(一般的経験則)から独立して先取りの想定された原因(普遍的因果法則)による自殺の社会決定論という意味で、実在論的自殺研究とされるのに対して、上記の二点は、一般的経験則の重視と社会決定論の放棄を意味していると思なすことができるからである。以下では、これら二点を視野に入れながら、公式統計に依拠する自殺研究との関係で、逆倒的な方法に現れているデュルケム『自殺論』における自殺の社会的原因を考察する。これは、上記引用文中の言葉を使うならば、自殺の社会的「原因の性質」を明らかにする作業だと言えるだろう。

ここでは、ダグラスと同じく統計的記述(一般的経験則)と普遍的に妥当する社会的原因(普遍的因果法則)の関係に注目しながら議論を展開し、ダグラスとは異なる結論を導き出す。公式統計に依拠する自殺の社会学研究は、公式統計の中に現われる一般的経験則から、その外側で発生する自殺に普遍的に妥当する因果法則を同定する作業と捉えることができる。このように捉えた場合、自殺の公式統計研究の対象(自殺に関する普遍的因果法則)は、公式統計という記述に現れる自殺に関する一般的経験則から独立しなければならない。つまりこれら二つは一致してはならず、それらの区別は維持されなければならない。なぜなら、もしもこれら二つが同じなら、公式統計作成プロセスの外側で発生する自殺に普遍的に妥当する因果法則は、公式統計を作成するという活動の産物になるからである。逆に、記述の対象が記述から独立していることが意味するのは、記述の対象は記述が



無くても存在する、ということである。つまり、一般的経験則は、普遍的因果法則の十分条件でないだけでなく、必要条件でもない。以上から、二つの因果法則の区別の維持という観点から見た場合、公式統計に依拠する自殺の社会学研究では、自殺の社会的原因(普遍的因果法則)は、それが経験的世界に由来する記述(一般的経験則)に基づくという条件によって、記述との区別の維持が不明瞭であると言えるだろう<sup>17</sup>。

これに対して、逆倒的な方法は、上記の二点の特徴を考慮すれば、これら二つの因果法則の区別を維持することが可能な方法となる。既に述べたように、ダグラスは、逆倒的な方法では普遍的に妥当する社会的原因が統計的記述から独立して先取りの想定されている点に注目し、『自殺論』を实在論的自殺研究として批判した。しかし、上で議論を展開した二つの因果法則の区別の維持という観点から言えば、記述の対象が記述から独立(实在)しているからこそ、記述はその対象を現す可能性を持つと捉えることが可能になる。この場合、ダグラスの批判では考慮されていない二つの点は、逆倒的な方法の中心の特徴となる。逆倒的な方法は、公式統計作成という人為的活動に由来する自殺の記述(一般的経験則)が自殺の社会的原因の解明に有効であると考え(つまり、一般的経験則の重視)。しかし、二つの因果法則の区別の維持に関する議論で示されたように、この場合の自殺の社会的原因は、ダグラスがデュルケム『自殺論』を实在論的自殺研究と位置付け、アトキンソンが自殺の社会プロセスモデルを撤回した際に想定したような、社会決定論の意味を持たない(つまり、社会決定論の放棄)。

これら二つの特徴を考慮した逆倒的な方法は、社会決定論とは異なる意味で、自殺の社会的原因の实在性にに基づく方法として位置付けることができるだろう。社会決定論と逆倒的な方法は、社会的原因を経験的世界に由来する記述から独立して予め想定する点では同じである。しかし、社会決定論では、この想定は記述を説明するためになされるが、逆倒的な方法では、この想定は記述とその対象の区別を維持するために要請されるのであり、記述はその原因によって説明されるのではなく、それを現す可能性が与えられるに過ぎない。つまり、逆倒的な方法には記述の説明という目的は含まれない。デュルケムの言う社会的原因の「性質」は、それが自殺の記述を説明するために想定されているのではないことを意味すると思われる。逆に、その想定を理由を記述の説明という目的に求めるならば、逆倒的な方法の議論全体が一貫性を欠き、ダグラスの言う「レトリック」として現れる可能性が出てくるだろう。そして、その場合、デュルケム『自殺論』は社会決定論と見なされる可能性が出てくるだろう。

逆倒的な方法という観点から本稿の考察の対象である自殺の社会プロセスモデルを再考

<sup>17</sup> 他方、アトキンソンの自殺研究は、公式統計作成プロセスが人為的活動(常識的知識に基づく自殺の理論化)であることに注目し、公式統計に基づく一般的経験則が人為的条件の外側には適用できない(普遍化できない)として公式統計に基づく自殺研究を批判したと見なすことができる。そして、自殺の社会プロセスモデルがデュルケム社会決定論として撤回されたのはこの文脈においてであった。これにより、アトキンソンの自殺研究では、普遍的因果法則という問題は不問となると言えるだろう。ただし、アトキンソンは、自分自身の研究の立場を、記述の収集に没頭する研究方法から明確に区別している

(Atkinson 1978: 182-183)。アトキンソンが問題としたのは、普遍的因果法則の経験的現れという意味での経験的一般則である(本稿 4-2を参照)。

するなら、このモデルの社会性（「社会統合」）は、そこに含まれる様々な自殺に関する記述の説明を目的として先取りの想定された普遍的に妥当する社会的要因としてではなく、記述との区別を維持するために要請された社会性として捉えることが可能になる。そして、その場合、自殺の社会プロセスモデルを構成する三つのステージに含まれる様々な自殺研究は、その社会性によって説明されるのではなく、その社会性を現す可能性が与えられることになる<sup>18</sup>。以上から、自殺の社会プロセスモデルは、逆倒的な方法という観点から再考した場合、自殺の説明という目的を達成するためのモデルではなく、自殺を説明の対象として位置付けるための一般的枠組みとしての役割を果たすと言うことができる。

本章を要約する。デュルケムは、『自殺論』第二編第一章で、その方法を「逆倒的な方法」として示した。この方法では、自殺の社会的要因に関する普遍的因果法則の分類から統計的事実に基づく一般的経験則の分類という手順が採用される。ダグラスは、このような逆倒的な方法に基づくデュルケム『自殺論』を實在論的自殺研究と位置付け批判した。ダグラスによる逆倒的な方法への批判は、アトキンソンが自殺の社会プロセスモデルを撤回した理由と同じく、デュルケム『自殺論』における社会決定論に向けられた。本章では、自殺の社会プロセスモデルを自殺研究の一般的枠組みとして捉えるために、逆倒的な方法を巡って議論を展開した。そして、デュルケム『自殺論』における自殺の社会的要因の性質を、記述（一般的経験則）と記述の対象（普遍的因果法則）の区別の維持という観点から考察した。これにより、アトキンソンとは異なる視点から自殺の社会プロセスモデルを捉えることが可能となる。その場合、自殺の社会プロセスモデルには自殺の説明という目的は含まれない。その代わりに、人類学を含む自殺研究の一般的枠組みとしてこのモデルを位置付ける可能性が開かれると思われる。

## 6. おわりに

本稿は、アトキンソンが提案しその後に撤回した自殺の社会プロセスモデルに注目し、アトキンソンとは異なる視点から、このモデルを、人類学を含む多様な自殺研究の一般的枠組みとして位置付けることを目的とした。当初、自殺の社会プロセスモデルは、公式統計の学術的資料価値に関する議論を背景としながら、公式統計に依拠する自殺研究に対する批判として提案された。その特徴は、それぞれが固有の社会的要因を伴う三つのステージから成る複雑な社会プロセスという視点から自殺を包括的に捉えることにある。第一ステージに対応する自殺行為の前段階では「応答」が、第二ステージに対応する自殺行為とその結果の間の段階では「介入」が、第三ステージに対応する自殺行為の結果とその記録

---

<sup>18</sup> これにより、デュルケム以降の自殺の公式統計研究が同じ命題を繰り返し検証してきた事実は（本稿 3-2 を参照）、批判されるのではなく、この命題が自殺の社会的要因を現している可能性として肯定的に捉え直すことができるのではないだろうか。更に、逆倒的な方法はアトキンソンの自殺研究とも両立不可能ではないと思われる。注 17 で確認したように、アトキンソンの自殺研究では、普遍的因果法則は否定されたというよりも不問となったのであり、経験的記述の収集は、それ自体が目的ではなく、規則性の発見のためとされる。ここでは、両者の両立可能性を積極的に論じることはできていない。しかし、両者は少なくとも両立不可能ではないと思われる。

の間の段階では「隠蔽」が、自殺行為で重要な働きをする各ステージに固有の社会的要因として位置付けられる。しかし、アトキンソンは、公式統計作成プロセスに関する経験的調査の後、その調査結果を考察する中で、デュルケムの社会決定論であることを理由にこのモデルを撤回した。

本稿では、自殺の社会プロセスモデルを自殺研究の一般的枠組みとして位置付けるために、デュルケム『自殺論』における「逆倒的な方法」に注目した。そして、自殺の社会プロセスモデルを、アトキンソンが採用した社会決定論とは異なる自殺の社会的原因の実在性という観点から再考した。アトキンソンは、公式統計作成プロセスに関する経験的調査の後、エスノメソロジーの知見を参照しながら死のカテゴリー化研究を自殺の社会学の方向性として示す中で、このモデルを撤回するに至った。本稿では、自殺の社会プロセスモデルを、「逆倒的な方法」という観点から再考することによって、人類学を含む自殺研究の一般的枠組みとして捉え直した。しかし、これは、アトキンソンの自殺研究を否定することを意味しない。逆に、自殺の社会プロセスモデルを逆倒的な方法という観点から自殺研究の一般的枠組みとして位置付けた場合、アトキンソンが示した自殺の社会学研究の方向性は、公式統計に依拠する自殺研究と共に、このモデルのステージ3に含まれる、という評価が可能であると思われる。このような評価の可能性それ自体が、自殺の社会プロセスモデルが持つ自殺研究の一般的枠組みとしての有効性を示していると言えるだろう。

3章で考察したように、自殺の社会プロセスモデルは自殺研究を包括的に捉えることを可能とする。実際、このモデルには様々な自殺研究を含めることが可能である。その中にはファースの自殺研究や復讐自殺という自殺概念などの人類学における自殺研究の成果も含まれ、他の自殺研究の成果との比較検討を可能にするだろう。更に、筆者自身のフィジーにおける現地調査資料や、フィジーにおける自殺の公式統計作成機関であるフィジー警察での現地調査経験も、このモデルの中に位置付けることで他の研究との比較検討作業の可能性が開かれると思われる。本稿の議論を踏まえ、自殺の社会プロセスモデルを視野に入れながら、人類学的な自殺理解および自殺研究の方向性という問題を改めて考えてみたい。

## 参考文献

Atkinson, J. M.

1968 "On the Sociology of Suicide," *The Sociological Review* 16-1: 83-92.

1978 *Discovering Suicide: Studies in the Social Organization of Sudden Death*, London: Macmillan.

Bhaskar, R.

2008 *A Realist Theory of Science*, Second Edition (first published 1975), London and New York: Routledge.

Bostock, T. and Williams, C. L.

1975 "Attempted Suicide: An Operant Formulation," *Australian and New Zealand Journal of Psychiatry* 9-2: 107-110.

Counts, D. A.

- 1984 "Revenge Suicide by Lusi Women," In D. O'Brien & S. Tiffany (eds.), *Rethinking Women's Roles*, pp. 71-93, Berkeley: University of California Press.

Douglas, J. D.

- 1967 *The Social Meanings of Suicide*, Princeton: Princeton University Press.

デュルケム、エミール

- 1978(1895) 『社会学的方法の規準』、宮島喬訳、岩波文庫。

- 1985(1897) 『自殺論』、宮島喬訳、中公文庫。

ファーブローウ・シュナイドマン (編)

- 1969(1961) 『孤独な魂の叫び』、大原健士郎・清水信訳、誠信書房。

Firth, R.

- 1961 "Suicide and Risk-Taking in Tikopia Society," *Psychiatry* 24: 1-17.

Gibbs, J. P. and Martin, W. T.

- 1964 *Status Integration and Suicide*, Oregon: Oregon University Press.

Healey, C.

- 1979 "Women and Suicide in New Guinea," *Social Analysis* 2: 89-106.

Hendin, H. (ヘンディン、ハーバート)

- 1960 "Suicide in Denmark," *The Psychiatric Quarterly* 34: 443-460.

- 1962 "Suicide in Sweden," *The Psychiatric Quarterly* 36: 1-28.

- 2006(1995) 『アメリカの自殺——予防のための心理社会的アプローチ』、高橋祥友訳、明石書店。

Jorgensen, D.

- 1983 "The Clear and the Hidden," *Omega* 14-2: 113-126.

Kobler, A. L. and Stotland, E.

- 1964 *The End of Hope*, New York: Free Press.

黒田 宣代 (編)

- 2006 『よくわかる社会調査法』、大学教育出版。

Lester, D.

- 1968 "Attempted Suicide as a Hostile Act," *The Journal of Psychology* 68-2: 243-248.

- 2001 "Nonfatal Suicidal Behavior as a Communication," *Crisis* 22-2: 49-51.

- 2008 "Suicide and Culture," *World Cultural Psychiatry Research Review* 3: 51-68.

McCarthy, P. D. and Walsh, D.

- 1966 "Suicide in Dublin," *British Medical Journal* 1: 1393-1396.

- 1975 "Suicide in Dublin I. The Under-Reporting of Suicide and the Consequences for National Statistics," *The British Journal of Psychiatry* 126-4: 301-308.

中 久郎

- 1979 『デュルケムの社会理論』、創文社。

サックス、ハーヴィイ

2013(1963) 「社会学的記述」『コミュニケーション紀要』、南保輔・海老田大五朗訳、  
第24号: 81-92。

シュナイドマン、エドウィン

2001(1998) 『自殺者のこころ』、白井徳光・白井幸子訳、誠信書房。

Siegel, L. J. and Friedman, J. H.

1955 “The Threat of Suicide,” *Diseases of the Nervous System* 16-2: 37-46.

Sifneos, P. E.

1966 “Manipulative Suicide,” *The Psychiatric Quarterly* 40-1: 525-537.

Stanley, W. J.

1969 “Attempted Suicide and Suicidal Gestures,” *British Journal of Preventive & Social Medicine* 23-3: 190-195.

Stengel, E.

1970 *Suicide and Attempted Suicide*, Revised Edition (first published 1964),  
London: Penguin Books.

Stengel, E. and Farberow, N. L.

1968 “Certification of Suicide around the World,” In N. Farberow (ed.),  
*Proceedings of the Fourth International Conference for Suicide Prevention*, pp.  
8-15, Los Angeles: Delmar Publishing Company.

Stewart, P. J. and Strathern, A.

2003 “The Ultimate Protest Statement,” *Journal of Ritual Studies* 17-1: 79-89.

杉尾 浩規(Sugio, H.)

2011 “Suicide Resulting from Domestic Problems in Fiji,” *Journal of Nanzan Academic Society Humanities and Natural Sciences* 2: 97-112.

2012a “Suicide Resulting from Love Problems in Fiji,” *Journal of Nanzan Academic Society Humanities and Natural Sciences* 3: 155-173.

2012b 「自殺の人類学に向けて——『個人』を巡る理論的問題」『年報人類学研究』第  
二号: 67-96。

2013a 「自殺と集団本位主義——デュルケム『集団本位的自殺』に関する一考察」『年  
報人類学研究』第三号: 136-151。

2013b “Suicide Resulting from Health Problems in Fiji,” *Journal of Nanzan Academic Society Humanities and Natural Sciences* 6: 159-180.

2014 「デュルケムの自殺定義に関する一考察——アルヴァックスとの比較を通して」  
『年報人類学研究』第四号: 60-77。

Taylor, S.

1982 *Durkheim and the Study of Suicide*, London: Macmillan.

1988 *Suicide*, London: Longman.

Varty, J.

2000 "Suicide, Statistics and Sociology," In W. S. F. Pickering & G. Walford (eds.), *Durkheim's Suicide: A Century of Research and Debate*, pp. 53-65, London: Routledge.

Walsh, B., Walsh, D. and Whelan, B.

1975 "Suicide in Dublin II. The Influence of Some Social and Medical Factors on Coroners' Verdicts," *The British Journal of Psychiatry* 126-4: 309-312.

Weiss, H. P.

1964 "Durkheim, Denmark, and Suicide: A Sociological Interpretation of Statistical Data," *Acta Sociologica* 7-4: 264-278.

Williams, M.

2001 *Suicide and Attempted Suicide*, London: Penguin Books Ltd.

## A Reconsideration of Atkinson's "Social Process Model of Suicide": From the Viewpoint of Durkheim's "Reverse Method"

Hironori Sugio

The purpose of this article is to reconsider the social process model of suicide that J. M. Atkinson proposed and then retracted, as a general framework for suicide studies including anthropological approach, from a different viewpoint. The social process model of suicide was originally proposed as a critical response to sociological studies of suicide based on official statistics. The model perceives suicide as a social process consisting of three stages, with a social factor characteristic of each stage having a vital role in the suicidal act; the first stage corresponds to the period prior to the act, the second stage corresponds to the period between the act and its outcome and the third stage corresponds to the period between death and its registration as a suicide, where "response," "intervention" and "concealment" are relevant social factors at respective stages.

The social process model of suicide allows one to examine various research findings regarding suicide from a perspective of social process, comparing ethnographic data and anthropological concepts of suicide with suicide studies among other disciplines. After conducting empirical research on the process of making official statistics, Atkinson retracted his model due to the fact that it reflected Durkheimian social determinism. For the social process model of suicide to be presented as a general framework for suicide studies, this article examines the "reverse method" used by Durkheim in *Le Suicide*, and reconsiders the model from the viewpoint of the reality of the social causes of suicide.

As a conclusion, it is shown that the possibilities are opened up for taking the social process model of suicide as a general framework for suicide studies; and for considering the study of suicide in anthropology with the model, from the viewpoint of the reality of the social causes of suicide, different from the social determinism adopted by Atkinson.

### **Keywords**

Social Process Model of Suicide, Social Determinism, Reverse Method, Atkinson, Durkheim